



(昭和62年3月25日 富岡畦草撮影)



(平成19年2月22日 富岡畦草撮影)

写真左側にそびえ建っている2棟のビル。PFI事業（公共施設の建設等を民間の資金、技術等を活用して行う手法）によって建てられた「霞が関コモンゲート西棟・東棟」である。残念ながらその後ろに隠れてしまった「霞が関ビル」であるが、今から40年前は日本初の超高層ビルとして竣工。今でも日本を代表するオフィスビルであることは間違いない。当時の計画の経緯や苦労話については、本誌「都市の記憶」をご覧ください。（文：渡辺邦博）



# 消えた街角。富岡畦草・記録の目シリース 昭和41年 今はずべてが語り草、霞が関変貌

今回の撮影の足場、合同庁舎三号館（通称：農林水産省ビル）が、海軍省跡地の二画を整理して建設されたのは、昭和二十七年（一九五二）。我が国で最初の合同庁舎建築だった。

戦前、官庁建築の重厚を避けて、直線的平面で軽快な白亜の大型ビルは、東洋を謳って建設の大手町ビルと並び、大いに評判となった。そして、外観以上に新鮮な印象を与えたのは、初の蛍光灯の採用である。夕方になると、昼を欺くように青白い光が室内に満ち、洩れる光が道行く人の顔まで照らし、タンダステン光しか知らない日本人に衝撃を与えた。それにも増して、地下食堂の料理の異様な色合いには全員閉口した。何しろ刺身がどす黒く、食欲を減退させた。それも食糧統制下、配給の食券がないと食べられない時代の出来事である。

ともかく、新築八階建の庁舎屋上は、霞が関の定点観測撮影を続ける私には、最高の足場を提供してくれた。写真はそこから、南西虎ノ門方向を見渡した場面である。眼下の交差点を隔てて、大蔵省、現財務省。以下同のコンクリート打ち放しの庁舎が大きく構えていた。とはいっても、昭和三十年（一九五五）までは連合国軍に接収され、フアイナンスビル

と呼ばれ、家主の大蔵省は、四谷小学校をはじめ、あちこちに分散、間借りして大層な不便を強いられた。

そのビルの階が食堂に当てられ、ダクトからのバターやチーズを使った料理の香りが、道行く日本人の足を止めた。鼻を鳴らして大勢が集まり、戦争に負けることも違うかしら、空腹をまぎらわせたものであろう。ちなみに、貧しいながら米飯が、食券無しで食べられるようになったのは、敗戦後十年経った昭和三十年（一九五五）である。

大蔵省の先には、関東大震災後の連の官庁建築、褐色煉瓦風タイル貼り六階建ての文部省（現文部科学省）庁舎が見えた。その先は外濠通りに沿って次第に高くなり、堂々とした石垣を築いた霞山会館があつて、よく連合国軍のジープが訪ねてきたのを記憶する。その先の、東京倶楽部ビルとその北隣にあった霞会館（旧華族会館）の敷地を有効利用し、日本初の超高層ビル三十六階建の霞が関ビルが昭和四十三年（一九六八）に竣工した。

（昭和四十二年十二月二十二日、昭和六十二年三月二十五日 富岡畦草撮影）

文 富岡畦草（とみおか けいそう）  
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員